

あかつき

大方あかつき館報

上林 暁文学のふるさと

第6号

2001年12月発行



自らの惨苦を見すえた不撓ふたうの作家

上林 暁

上林暁文学館協議会委員長 野並 浩

上林暁（本名・徳廣とくひろ厳城）は、明治三十五年（一九〇二）十月六日、高知県幡多郡田ノ口村（現・大方町）下田ノ口で、父伊太郎、母春枝の長男として生まれた。（のちに二男五女の弟妹が誕生当時、小学校の教員であった父は、単身赴任で任地を転々としていたので、暁は祖母と母の三人で幼児期を過ごした。）

明治四十二年（一九〇九）四月、暁は下田ノ口尋常小学校（現・田ノ口小学校）に入学。入学して二日目に学校が嫌になり父の激怒をかう。また母春枝によると、「小学一年生の時、学級の級長になるのをいやだと言って泣いた」とか。母親の前には、のちの芸術院会員の上林暁も駄々をこねる泣き虫つ子だったようである。かつて暁と同級生であった女性「厳城さんは運動会では早い方じゃなかったが、よう勉強はできたのう。」と、小学生時代の暁のことを懐かしく話をしていた。

小学校を卒業した暁は、父の強要もあって高知県立第三中学校（現・中村高校）に入学し、往復四里（十六キロ）の道を徒歩通学する。その頃の様子を暁は「四万十川幻想」（「展望」昭和四十六年十一月号）に「大正四年の春、私は中村町（中略）の県立第三中学校へ入学した。十四才で小さな生徒であった。靴は九丈半、身の丈は四尺四寸であった。クラスでビリから三番目か四番目であった。毎朝（八キロ）の道を歩いて、町の東を流れる後川うしろがわを渡って、町に入った。」と、述懐している。

暁は、小学生の頃から見様見真似で俳句を作ったりした。中学生になると、下田ノ口の友人たち

と「かきせ」（ふる里を流れる瀬瀬川から取った名前）と言う回覧雑誌を出し、文学に興味をもちはじめ、将来は芥川龍之介のようになりたいと作家を夢見るようになった。

「私は中学二年の頃、文学に眼覚めた。眼覚ると同時に、文学が私を捉え、私の一生の方向を決めてしまった。それ以来私は、「文学の道」という唯一の道を歩んで、今日に至っている。」暁が、昭和十五年随筆「私の小説勉強」に記した文面である。文学への固い決意が偲ばれる。

大正十年（一九二一）中学校を卒業した上林暁は、熊本の第五高等学校（現・熊本大学）文科甲類に進み、勉学の傍ら創作活動にも専念し始める。同年秋、交友会雑誌「龍南」の懸賞創作に応募した小説「岐阜提灯」が三等に入選。その後も「龍南」の編集に携わるなどして、作家への志を固めていくことになる。

大正十一年（一九二二）、暁はペンネーム「上林暁」の由来となる熊本市上林町に下宿する。（筆名の上林は上林町から、暁は字画が好きだったそうである。もう一つは下宿の便所から金峰山を見ると、暁の光が赤紫に照り映えて、それに魅せられたと述懐している。）そこで、初恋の人ともいえる女性に出会った。その折のことは後に小説「梧桐の家」と題して発表している。

暁にとって熊本での五高時代は作家への志を固めると共に、淡い恋も体験した。その後の境遇と照し合わせる時、もっとも輝き、まさに人生の青春時代でもあった。

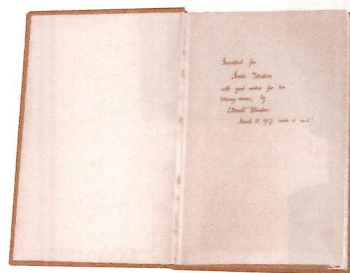
また、暁は熊本について憧憬と郷愁の情で記し

ている。「僕は、熊本のことと言えば、人のことでも何にでも関心を持ち、そして熊本びいきである。むかし熊本で学校へ行ったので、このコネクションを愛する気持が、自然にさうさせるのである。」

第二の故郷といふ言葉があるが、熊本は僕にとつて、文字通り第二の故郷になつてゐる。（随筆「熊本びいき」より）

大正十三年（一九二四）、暁は旧制五高を卒業、東京帝国大学文学部英文科に進学。その年英国の詩人エドモンド・ブランドン氏が講師として赴任し、暁は三年間英文学を学んだ。その頃のエドモンド・ブランドン先生の講義の様子を暁は、随筆「ブランドン氏の記念品」の中で、「大正十三年の春、ブランドン氏は日本へ単身赴任して来た。そのとき僕たちは新入の一年生だったので、氏の在任期限である三年の間、完全にその講義を聴くことが出来た。（中略）ブランドン氏がチャールズ・ラムを語る時の喜ばしげな表情や、コオルリツジの詩『クリスタベル』やシェークスピアの『キング・リヤ』を講読する時の滑かで柔な音声は、今でもありありと思ひ浮べることが出来る。」（中略）恩師エドモンド・ブランドン氏を暁は敬愛の念を込めて綴っている。

やがて、ブランドン氏が任期を終えて日本を去るに臨んで、暁はブランドン氏が著した詩集『THE SHEPHERD』に、記念にと署名してもらっている。



ブランドン氏が著した詩集
『THE SHEPHERD』

大方あかつき館

〒789-1931 高知県幡多郡大方町入野6931-3 TEL:0880-43-2110 FAX:0880-43-0222

濃紺の装丁の裏表紙には実に丁寧な横文字で、小説家を志す暁へ贈る祝福と励ましの言葉が書き添えられている。日付けは一九二七年三月十五日。七十数年の歳月が過ぎ去っているわけであるが、今も鮮明なインクの筆跡に当時の恩師と教え子との温かい心の交流を垣間見ることが出来る。

(上林暁文学館資料室から)

昭和二年(一九二七)、暁は東大の英文科を経て改造社に入社。五高出身の東大英文科の仲間らと同人雑誌「風車」を創刊。(ペンネーム上林暁を用いる)翌年、田島繁稲(元軍人で退役後、高知師範学校で教鞭を執る)の長女繁子と郷里下田ノ口で結婚式を挙げた。(後に一男二女を儲ける)

昭和八年(一九三三)、暁は新潮に「薔薇盗人」を発表。この小説で新進作家として注目される。翌年、暁は改造社の編集主任を最後に退職。文筆一本で暮らす決意を固める。その後の十数年間は、まさに苦悩の日々の連続であった。父の病気を機に妻子を連れての帰郷。その頃の兄暁の様子を妹の徳広睦子さんは、随筆「兄の左手」に次のように記している。「兄は散歩にもよく行っていた。子供を連れて、ボサボサ頭に両手を帯の前にはさみ、蟬瀬川のほとりや、浜辺にふらふらと歩いて行くのを見かけた。夕方になると、毎日風呂の焚口にしゃがみ込んで、火を焚きつけていた。その焚口の地面に、木切れで字を書いては消し、書いては消し、物思いにふけっていることもあった。」(中略)

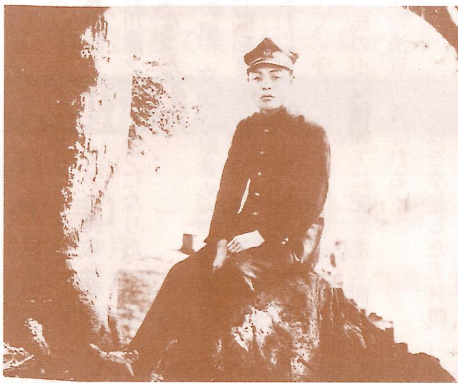
上京後も作家として行き詰り、病妻を抱えての看病。そして戦争による生活の困窮など、様々な惨状が暁の身の上を襲った。そうした危機を救ったのが『私小説』への

道であった。自らの体験をもとに、事実をぶちまけるように妻の看病生活を優しい眼差しで描いた作品「聖ヨハネ病院にて」がある。この小説は戦後文字の傑作の一つに数えられている。(この作品を中心に脚色、「あやに愛しき」と題して映画化され、大きな感動を与えた。監督・宇野重吉、出演・田中絹代)

暁が五十歳の折、軽い脳溢血を患うが再起。その頃、暁は郷土の風物や人々に題材を求め数多くの短編小説を書いている。その中の一つに「春の坂」(昭和三十三年度文部省芸術奨励賞)がある。それから十年後、五高以来四十年ぶりの熊本旅行を直前に脳溢血が再発。右半身不随となる。以後十八年間病床に臥するが、睦子さんの献身的な介護や口述筆記に支えられ創作活動を続け、「白い屋形船」(昭和三十九年度読売文学賞)、「ブロンズの首」(第一回川端康成文学賞)が受賞に輝き昭和文壇に多くの業績を残している。

「手が思うように動かないと言って癱瘓をおこし鉛筆を投げつけたこともあった。力が足りなくて消え入りそうな所は、なぞった。『二字でも、一篇でも多く書き残したい』と言う兄は、痛ましいほどの身体に鞭打って、なお小説を書き続けた。」(「兄の左手」より)亡くなる四日前まで綴った「秀夫君」が絶筆となる。(上林暁文学館常設展示室)

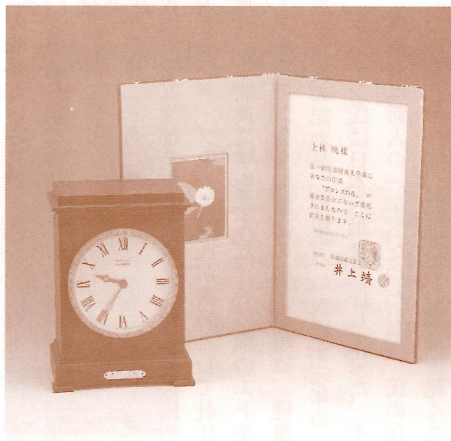
来年十月六日には、「上林暁生誕百周年」の記念行事が大方町主催で開かれる。是非お越しください。



東大時代の暁



東大構内にある
エドモンド・ブランデンのレリーフ



第一回 川端康成文学賞



久保孝雄製作のブロンズ像

二冊の本

—上林暁文学館協議会委員—

橋田 秀代

さあ、どの本にしたものか。

インド漂流のおともに、ドストエフスキの「死の家の記録」を持参した。出発の日だけをしるした、片道切符である。わずかな金、計画なし、目的なし、インドについてのウンチクなし。こうして、私は、依って立ってきただ方暮らしの陣地をたたんだ。けれども、前途もまた中空として寄る辺もない。

三島由起夫いわく、インドに行くには時があり、そしてそれは魂の質の問題であるとも。さて私には、それはどうだったか。

九十二年十一月、インドは、私の精神や言葉、地図上の領域から、本当の現実となった。自分が赤裸に、容赦もなくなためされ、さらされる。ちつとやそつとじゃあ通用せん。そこは非西欧であり、何よりインドである。

臆病なくせに、ナンギなことをしたがる。なんとまあ、やつかいな生き物であることよ。

それやこれやの不安やら武者震いやらで、死という観念に違和感を感じなかつたのかもしれない。

インドは何もかも泥でできている。人々も動く泥だ。フォースターは「インドへの道」で表現している。十億インドのカオスは、ニューデリーを発つや、一世紀後の今もあてはまる。

十二月、バスはパキスタン国境近くに向かつていた。カシミールをめぐるインド・パキスタンの紛争に一日の平和もない。上空には軍用ヘリが、タール砂漠のあちこちには軍用トラックが要塞のように点在した。長い長い車中、私は酔いもせず、最後部の座席で読書した。こうして毎日毎日の強烈な異文化から、私は自らを調節していたのかもしれない。

もう一冊はいただきもの。バラナシ

で。「正法眼蔵随聞記講話」

聖地バラナシから、巡礼者の姿が消えた。ヒンズーとイスラムの宗教戦争である。公共機関がストップ、夜間外出禁止令、カーヒューが発令された。外国人も一気に消えた。

私は、私の安否を気遣ってくれる人々の心配が心配になった。とにかく、国際電話を探した。バラナシでようやく通じた。隣りでは、体毛の濃い男性が、目覚まし時計のようなもので私の通話をはかっていた。

バラナシでの一日は、道元を読むこととで始まった。不思議なくらい、心が鎮められた。

帰国後、私はこの本を何冊も購入した。それからそれを、心配してくれた人達に贈った。けれどいまだ、その本を読んだとも読まないとも聞かない。さては、あの、それぞれの時のせいということか。

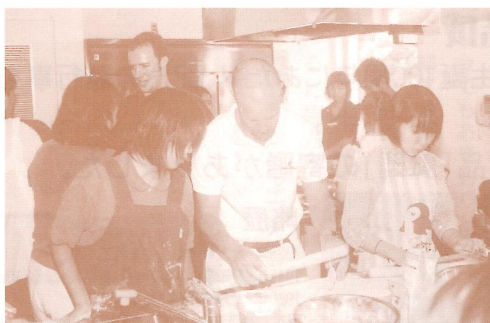


生涯学習係からのお知らせ

1.生涯学習事業

(1) 青少年健全育成事業

1月5日(金) 新春かきぞめ大会(対象/小・中学生)
1月12(土)・13日(日) わんぱくスキー教室(対象/小学校6年生)



ワールドクッキング

(2) 成人式

1月3日(木) ふるさと総合センター

2.生涯スポーツ事業

- 1月 大方町民マラソン大会
- 2月 市町村対抗駅伝大会
あしずり駅伝大会
- 3月 大方町民駅伝大会兼四国の道駅伝大会
ジュニアバスケットボール大会
バードランド周回駅伝



星座教室

文化振興係からのお知らせ

第39回・大方の秋まつり盛大に開催

日時/平成13年11月10日(土)～11日(日)

場所/ふるさと総合センター

「心のふるさとをとりもどそう」を開催テーマに、展示部門、お祭り広場の出店、郷土芸能などが繰り広げられ、たくさんの人達で賑わいました。



1.図書館より

●感想絵コンクール

・募 集 12月2日～1月6日

・入選作品展示 1月8日～1月20日 展示場所:大方あかつき館 町民ギャラリー

★感想絵コンクールの詳しいことは、大方あかつき館(図書館の係り)にお問い合わせください。

●とっても日曜日

・第1日曜日 絵本を楽しむ会 (大方あかつき館 2階和室)

・第2日曜日 絵本を楽しむ会 (大方あかつき館 2階和室)

・第3日曜日 お楽しみ

・第4日曜日 ビデオ上映 (大方あかつき館 レクチャーホール)

★図書館では、毎週日曜日絵本の読み聞かせやビデオの上映などを行っています。
日曜日は、図書館で楽しんでみませんか。

2.文学館より

企画展

【兄の左手】ー上林 文学と妹 睦子ー

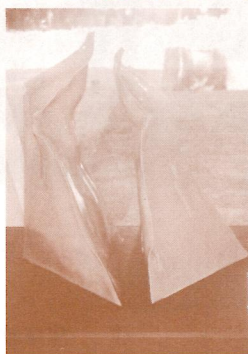
1月～3月 上林暁文学館

脳溢血で倒れて病床にあること18年、文学の執念を燃やして創作活動を続けた上林暁を看病し、執筆を助けた妹睦子

上林暁生誕100周年記念事業実行委員会結成

2002年(平成14年)は、郷土が生んだ作家上林暁の生誕100周年にあたり、記念の諸行事を行うため実行委員会が結成されました。

●現代工芸美術家「田辺陶豊先生」から日展出品作品「風門」の寄贈がありました。



(大方あかつき館ホール)

作品介绍

遙か彼方で生まれた五月の風は、二つのオブジェを組み合わせで構成された「門」を抜けてやってきます。それは、青い海の音と協奏さながら平和で響きのある風です。

私の創作活動の原点は、海のある故郷の印象ですが、この「門」もこうした風物の中にあるのではないかと想像して主題を「風門」としました。

(田辺 陶豊)



(田辺陶豊先生)

略歴

1925年・大方町浮瀬に生まれる
1945年・高知県・中学校教員(美術)となる(1981年退職)
1980年・大方町浮瀬に開業
現在 社団法人・現代工芸美術家協会会員
製作歴
1943年・この頃より美術に志し、洋画・彫刻に取り組む
高知県展 特選四回(工芸二回、彫塑二回)
褒状七回(工芸四回、彫塑三回)
全国県展選抜展出品・彫塑の部(文化庁主催)
国際彫刻シンポジウム参加(1985年)
第二回FUIJビエンナーレ造形コンクール陶部門・金賞
日本現代工芸美術展入選(六回)
同展現代工芸賞受賞(以後会員として出品)
日展第四科美術工芸部門入選(三回)
1998年田辺陶豊作品集「奏」を出版

大方あかつき館

〒789-1931 高知県幡多郡大方町入野6931-3 TEL:0880-43-2110 FAX:0880-43-0222